

難民救援情報誌

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー — 試行錯誤 —
No. 34



自立のための 日本語

—日本語家庭教師活動—

植田 博

小・中学生の勉強をみる
学生ボランティア

1981年から数名の JVC ボランティアが個人的に定住者（インドシナ難民で日本に定住した人々）の家庭を訪問し、日本語を教えたり、さまざまな相談に乗ったりし始めました。'82 年秋からは、毎月一回ミーティングを開くなど、本格的に取り組んでいます。本誌16号、21号や、新聞、情報誌などを通じて活動の紹介とボランティア募集をして、現在では、活動ボランティア35名、対象定住者35家族に広がっています。

日本に定住することになったインドシナ難民は、まず政府が開設した定住促進センターで3ヶ月間の日本語教育と生活指導を受け、就職が決まると日本社会の中に入って行きます。しかし、3ヶ月という短期間の勉強では必ずしも十分ではなく、言葉が障壁となって自立できない場合が少なくありません。例えば、定住者が抱える問題には、

- ・職場で……定住者の多くは単純作業の仕事につくため、日本語を使う機会が限られて実戦的な言語訓練ができません。また、言語や習慣の違いから、職場内で孤立したり、転職したりする例もあります。
- ・地域社会で……近所づきあいが不足しがちです。
- ・学校で……子供たちは会話はできても、教科書さえ読解できません。
- ・日常生活……子供の教育問題や、医療、社会保障、税金などの仕組みや利用方法がわからないことがあ

ります。

このような諸問題の中核となる原因に日本語能力不足が考えられます。定住者の日本語能力が向上することが、定住者の自立に不可欠なのです。したがって、定住者も日本語学習を強く要望しています。しかし日々の仕事に追われる定住者には、日本語学校へ行く時間的余裕のない者の方がずっと多いのです。

そこで、私たちの「日本語家庭教師活動」は、定住者が日本社会で自立するために最も必要な日本語能力の向上を第一の目的としています。ボランティアは、少なくとも毎週一回、それぞれが担当する定住者の家庭を訪問して、以下のような活動を行います。

- ① 日常会話を中心とした日本語指導。
- ② 学生・学童を対象とする補習。
- ③ 日常の諸問題の解決に助力すること。

また、活動を円滑に行なうために連絡係を置き、ボランティアの紹介や連絡調整、事務処理をしたり、地区ミーティングを開いて意見交換をしています。

<日本語指導>

テキストは、定住促進センターが採用した「日本語の基礎」を復習することが多いのですが、定住者の能力に応じて調整しています。ボランティアは身振手振も混えて、日本語で日本語を教えています。

「どの教科書も完全なものはないと思うので、今は教科書の基本文型をもとに、私が日常よく使う会

話をつくり、応用練習を多くしてやっています。なるべく教科書は伏せて、不完全でもまず自分の言葉で言わせ、その後で助詞などを補うようにしています。自作の応用問題の中に出てくる名詞や日本の風習などを詳しく説明すると、とても興味深く聞いて、「カンボジアでは…」という積極性も見せます。」(横谷まゆみの報告書より)

私たちが日常使いこなしている日本語も、教えるとなると大変に難しいものです。ほとんどのボランティアが日本語教授法を知らないで活動に参加したので、コロナ的ではありませんが、'83年4~6月に約20名が日本語教師養成講座を受講しました。これからも、研修や学習を続けながら、より効果的な日本語指導を行ないたいと思っています。

<定住学童の学習指導>

戦乱で学校教育を受けられない期間があったことや、日本語能力の問題から、定住学童は実際の年齢より低い学年に編入されます(たとえば、13才で小学校4年)。しかし、年齢と学年の整合をとるために、約3ヶ月で1学年進級する「飛び級」も行なわれ、(同じ子供が1年後に14才6年生)、系統的な学力の蓄積がありません。さらに、どの教科にしても教科書さえ読めず、算数と漢字の勉強で精いっぱいといったありさまです。私たちは、学校の先生とも相談しながら、学校の宿題と予習・復習を中心に指導しています。

「活動を始めてから痛切に感じているのは、子供を教えるということが、定住難民の手助けというよりも、子供の教育そのものであるということです。

カンボジアでは不幸な境遇にあったのだから、日本では少しくらい甘やかして幸せな毎日を送らせてやりたいとも思う。しかし、贅沢すぎる日本の物質文明に毒されてしまっは、かえって不幸なことだろうとも思えます。つらい経験を克服することによって、日本社会の誤りをも見抜けるような人間になって欲しいのです。しかし、私たちにどれだけの力があるのか不安です。」(小林左樹子の報告書より)

<定住者の日常生活とのかかわり>

定住者の手元にも、日本語の文書がたくさん届きます。学校の通知、社会保険、税金、町内会の通知など。この中で、どれが不要で何が重要かを判別したり、書類に記入したりする必要があります。もちろん、定住者が自分で処理することが大切ですけれども、当分の間はどうしても手助けが必要です。

たとえば医療ひとつにしても、腸閉塞をおこした

子供の通院に付き添ったボランティアの報告書には、「日本語がわからないために、症状の説明が出来ず、また医者説明が理解出来ないという不自由が生じます。これは病気の時には致命的です。そのために彼らが浮べる不安そうな眼差し、もどかしげな表情が忘れられません。こういう時には、私たちボランティアに限らず、地域の人々、より日本語のできるカンボジア人などの助けが必要です。今回も病院の健康保険の手続を全部とって下さったのは、団地の会長さんでした。」(末藤春美)

また、他の報告書には、「定住者の家まで2時間位かかります。緊急事態が起きた時、即、対応できるとは思えませんし、毎日通うわけでもありません。最終的には、ボランティアは身をひく立場です。彼らは、その地域に根付いた社会の一員として暮していかなければなりません。そのためには、近所付き合いが大切なのです。」(森山久寿子)

さらに、「今、一番求められているのは、定住者自身の積極性です。これさえあれば、日本人が手をかす必要があるのか、また、手をかすことが彼らのプラスになるのか、ということが私にはわかりません。私の友人で難民と似たような境遇だった人がいて、「援助というかたちでスポイルされることがなかったからこそ現在の自分がある」といいました。それには一理あると思いました。」(横谷まゆみ)

このように定住者の日常生活との関わりは、定住者の日本語能力が十分ではない現状では、大変に重要なことです。私たちも、もっと効果的で間違いない助力をするために医療や社会保障について学ばなければなりません。

しかし一方で、安易な同情を寄せることが、定住者の自主性、積極性を奪ってしまう危険性があることに十分な注意をするべきです。一方的な援助に定住者が依存してしまっは、私たちがめざす定住者の自立はありません。

私たちは、まず定住者の自立に不可欠な日本語指導を活動の中心に据えました。そして、日常生活の相談や問題等に、どこまで関わるのかという点に注意しながら、必要な部分には、定住者といっしょに親身になって手伝って行きたいと考えています。

<日本語家庭教師を募集中>

別表の募集地(特に神奈川県)では、ボランティアを募集しています。応募する方は、志望動機作文(3枚以上。活動の意義や難民問題などに対する考えも含めて。)を書いてJVC 東京事務所に送ってく

ださい。折り返し、案内をお送り致します。

活動にあたっては、次の確認事項を守って下さい。

- ①政治、宗教、国籍、信条などの相違に関わりなく、定住者にとって真に必要な援助を行う。
- ②常に定住者の立場で考え、行動する。
- ③少なくとも半年以上、責任ある活動を継続する。
- ④ミーティングや通信・電話などで連絡を密にする。
- ⑤やむを得ない理由で活動を中止する場合は、少なくとも1ヶ月前に地区連絡係に報告し、引き継ぎを行う。

そんぽんと(日本語家庭教師会報)の抜粋

…必ずといっていいほど家庭料理をご馳走してくれるのです。「日本にはないだろう」「これはおいしいんだ」などと言いつつ勧めてくれるのですが、その量の多いこと。「もう、はいりません」といって

断わると「おいしくないんですね」と悲しそうな顔。悪気はないのですが、料理に関してはたくさん食べる程喜ばれるようです。知力より胃力を要求されることの方が多いかも…。(森山久寿子)

「私は見た！カンボジア式 子供のしかり方」

3才の子供が突然泣き出した。聞けば三輪車が欲しいという。そこに、電気コードを手に持った母親がやってきて、「ターマイ(ごめんといわんか!)」とマジに脅し始めた。あまりに真剣な雰囲気、しばし呆然…初めは泣き止まなかった子供も真顔になってあやまり始めた。なんと、タイ式の最敬礼のポーズなので。両手を拝むようにして合わせ、膝をくずして座するという…。何かとてもきれいなものを見たような気がして、しばし感動。異文化の一端を垣間みたように思いました。(横谷まゆみ)

活 動 一 覧 表 (1984年1月現在)

場 所	対 象 者	内 容	現 ボランティア数 (不足している人数)	
神 奈 川	相模野(海老名市)	カンボジア人, 1家族	日本語(週1回)	2名 (2名)
	川井宿(横浜市)	カンボジア人, 7家族	" (各家族毎週1~2回) 学校教育(週1回)	9名 (多数)
	つきみ野(大和市)	中国系カンボジア人, 3家族 カンボジア人, 4家族	日本語(2グループ毎週1回)	4名
	上瀬谷(横浜市)	カンボジア人, 3家族	" (週1回)	2名
	横浜教室	ラオス人, 4名	" (週2回)	1名
	厚 木	カンボジア人, 2家族	" (週1回)	1名 (1名)
	茅ヶ崎	ラオス人, 1家族	" (週1~2回)	(2名)
	藤 沢	ベトナム人	" (週1~2回)	(1名)
東 京	鴨 居(横浜市)	カンボジア人,	" (週1~2回)	(2名)
	赤 坂(港区)	カンボジア人, 2家族	" ・学校教育(各週1回)	3名
	椛 谷(大田区)	カンボジア人, 1家族	学校教育(週1回)	2名
	中 台(板橋区)	カンボジア人, 1家族	日本語(週1回)	1名
	吉祥寺(武蔵野市)	ラオス人, 1名	" (不定期)	1名
	板 橋	ベトナム人, 1名	受験勉強(週1回)	1名
	西巣鴨(豊島区)	カンボジア人, 1家族	日本語(週2回)	2名
	代々木(渋谷区)	ベトナム人, 1家族	" (週1~2回)	(2名)
埼 玉	八 潮	中国系カンボジア人, 2家族	" (週2回)	2名
	蕨	カンボジア人, 2家族	" (週2回)	2名
	柳 崎(川口市)	カンボジア人, 1家族	" (週1回)	1名
	大 宮	カンボジア人, 1家族	" (週1~2回)	(1名・女性)
	上福岡	カンボジア人, 1家族	" (週1~2回)	(2名)
千 葉	市 川	ベトナム人, 1家族	" (週1回)	(1名)

※他にも神奈川県内で多数募集中。お問合せは毎週土曜日(18:00~21:00)JVC東京事務所、榎田又は鶴田まで。

JVCスタディツアー

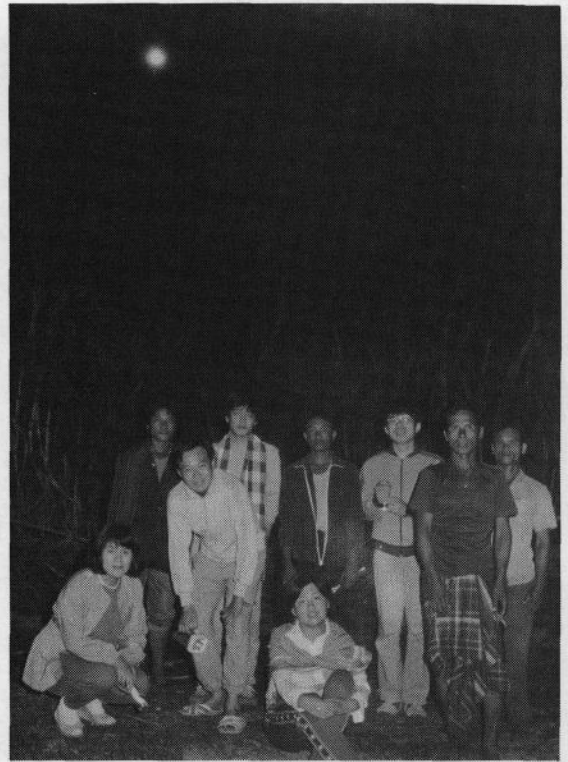
第1回 83.11.19～29

JVCのメンバーは、この4年間タイでの活動を通して接したインドシナの人々に、多くを教えられてきました。その中で気がついたことは「日本はアジアだ」と言いながら、私達日本人の多くは東南アジアについて、アジアについて全く知らないという事。又知ろうとすらしてなかった事です。

東南アジアのもつ多様性と日本との種々の相違は、私達の漠然とした想像をはるかに超えていました。そして逆に日本について知られていることは、悲しいことに日本の製品と企業名くらいしかありません。

一方、私達の周囲には難民問題や貧困の問題に真剣な関心をよせている人々の少なくない事も事実です。そこで、現地の人々に少々負担をかけることになるのですが、JVCは、アジアへのあるいは世界への問題意識を持ちながら短期間しか日本を離れられない人々のために、独自のスタディツアーを企画しました。一般の観光旅行とは全く異なり、現地で生活する人々、活動している人々の協力を得て、タイ農村・難民キャンプ・都市スラムを訪れ、活動の見学と、様々な状況の中で生きる人々との交流をほんの少しですが実現できたのではないかと思います。

参加者にとっては、そこで触れ得た現実に対して一生を通じどのように関わられるかを考える旅でもありましょう。その土地に自分の足で立ち、自分の眼で見、言葉を交した時が新たな認識の出発点です。



ランプしかあかりのないサムヘツ村の夜
スタディツアー参加者と村人達

撮影 坂本銃兵

自分自身が試される

高原 孝生

私は常日頃、いわゆる第三世界をこの目で見て来たいと、もどかしく思っていた。また、『トライアル・アンド・エラー』を定期購読してきた者として、10日間という短期間で、ボランティア活動をしている人たちの話を聞き、現場に少しでも触れる機会が与えられるという、このツアーの特色に強く魅き付けられたのである。そのような個人的期待をこのツアーは十分満たしてくれた。なかでも、自分自身が試されるという点で印象深かったのは、無論、サムヘツ村であるが、パナニコム難民キャンプ、クロントイ・スラムもまた、「見学」に終わったとは言え、インパクトを覚えた。JVCの人たちを初め、様々な人間との「出会い」を感じられたのも嬉しく、その意味でも充実した旅だったと言える。

帰国して思い出されたのは、「カルチャー・ショックは日本に帰った時の方が大きい。」という言葉であった。かつて、ヨーロッパ人旅から帰国した時、日本の街は猥雑に思えたものだが、今回は、ひたすら小綺麗で無機質な印象である。そこに住み、暮す自分を見つめる新しい目が自分の内部に存在し始めたのは期待通りであった。

小さな集まりでスライドを上映し、何度も話をしながら、タイで見たことと日本で見えるものとのつながりを、いろいろなレベル（社会的・経済的な関連から個人的体験の意味付けといったことまで）で、考えて行く。当面そのような作業が私の生活に付け加わることになった。（抜粋）

第1回スタディツアー 日程 (10泊11日)

11月13日(日) 16時～19時 オリエンテーション (東京事務所)			
11月19日(土)	PK 763 15:15 成田発	22:20 バンコク到着	クリスチャン 学生センター (SCC)泊
20日(日)	現地オリエンテーション/バンコク眺望 夜行列車でプリラムへ		車中泊
21日(月)	プリラム師範大学訪問	午後 プリラム県 サムヘツ村へ	農家泊
22日(火)	サムヘツ村 稲刈作業見学	となりのノンデーン村訪問	"
23日(水)	ノンカトゥーム村 運動会	列車でバンコクへ	SCC泊
24日(木)	バスでパナニコムへ	キャンプ及び日本語学校訪問	パナニコム泊
25日(金)	バスでバンコクへ	クロントイスラム訪問 見学	SCC泊
26日(土)	チュラロンコン大学のスリチャイ先生訪問	エメラルド寺院 訪問	SCC泊
27日(日)	早朝列車でナコン・パトム, クワイ河へ	ムニチ・デッキ「子供村」へ	"
28日(月)	バンコク市内の病院で健康診断	自由時間 夜空港へ	"
29日(火)	PK 760 1:45AM バンコク発	12:00AM 成田着 (解散)	

第2回以降もタイスタディツアーは概ね上記のような日程で行なわれます。第2回は3月17～27日を予定しています。参加費は16万円(会員15万円)。お問い合わせは JVC 東京事務所、熊岡まで。

見ることから

私は今、横浜市中区にある寿町という、いわゆるドヤ街の少年野球チームの監督をしている。寿町に来るようになったのは、今年2月明るみに出た「浮浪者襲撃事件」の取材がきっかけであった。

当時私は、某新聞社の記者をしていて、10人の少年たちに殺された浮浪者が日雇労働者であったことなど、認識をあらためながら、寿町に通うようになったのである。

大学時代まで野球をやり、自称「甲子園落ちこぼれ」の私は、子供たちに野球を教えることしか今はできないが、これをやりながら寿町に通うことで、今日の日雇労働者がどういふ状況にあるのか少しずつわかってきた。

1973年のオイル・ショック後、長引く不況の中で日雇労働者の仕事はますます少なくなっている。失業者の数はうなぎのぼりに増え、夜宿せざるをえない労働者も増加している。

不況の原因など難しいことはわからないが、寿町の場合、港の仕事が極端に減っている。全体的に船の出入りが減ったこともあるが、船が韓国などに入

坂本 銑兵

港してしまうことを知った。人夫の件費も船の入港税も韓国の方が安いのである。また、船員もフィリピンなどから「安く」雇い入れているという。

「浮浪者襲撃事件」の背景に、これらの失業増もある。と同時に60年代初めからの高度経済成長による「快適な暮し」もあると指摘する人もいる。

高度経済成長を最も底辺で支えた日雇労働者を、高度経済成長の中で育った少年たちが殺した事件であったが、今その底辺は遠く東南アジアにまで拡がっていることを、私は寿町で見た。事件の取材を通じて、自分の作ってきた生活そのものを問われていたが、その生活を維持するために韓国や東南アジアの人々まで収奪していたことは、本やテレビでは知っていても、身近なものではなかったのだろう。

私は今、今こそ、東南アジアをこの目で見たいと思う。東南アジアから今の日本を、そして私を見たいと思う。

1951年生まれの私は、アメリカやヨーロッパの知識に比べ、あまりにもアジアを知らない。「田舎の教師」を読んで、タイにも「東北」があることを知っ

た。私自身、日本の“東北”出身だが、タイにも“東北”があることを知って驚いたのは、タイ全部が貧しい国というぐらいの認識しかなかったのだろう。寿町「貧乏人の町」とだけ思い、野宿する人を「浮浪者」に過ぎないと思ってきた感覚と、それは同じだ。

とにかく、この目で見ることに、そこに住む人間と接すること、それが大事だと寿町に通う中で知った。「インドシナ難民」とマスコミなどにいわれても、そこに居る人間を見なければ何もわからない。そういう時代に私は生きているようだ。何のための情報化社会かと思う。

「メイド・イン・東南アジア」(塩沢美代子著、岩波ジュニア文庫)のようなものが、私の子どもの頃の教科書に入っていたらなあ、と、文部省をうらむ気にもなる。しかし、教えてくれなかったと言っても仕方がない。「メイド・イン・東南アジア」のように、今の自分たちの生活と結びつく形でアジアをとらえて行きたい。

私は今、カメラマンとして生きる道を選んだが、写真は「見る」ことから始まる。いきなりシャッターを押すのではなく、自分の心の中の「共感」をじっくりと見つめ、ゆっくりとシャッターを押すカメラマンでありたい。今タイに行くことは、私にとって「現代」を認識するためのものになろう。



パナニコムの子供たち 撮影 坂本銃兵

☆ ☆ ☆

ツアーの間、どうしても子どもに目が向いた。10日間の旅を終え、成田から横浜の自宅に帰る間、日本の子どもたちの顔をもう一度見返したら、そのあまりの無表情に驚いた。タイに行くまでにも、ずっと子どもの表情をカメラで追っていて、この2、3年の間に、子どもたちの目にだんだん光がなくなっているな、とは思っていたが、タイの子どもたちと比較してみると、そのあまりの差に驚く。「無気力」というより、「無機物」という感じ。

ツアー2日目の20日、私は見た。バンコク市内の道路で物を売る少年・少女。サンデー・マーケットで店を手伝う子ども。夜行列車の中や停車した駅での売り子たち。翌朝、列車に乗り込んで来た母子。そして、サムヘック村に着いた日の夕方、牛の手綱を引き、あるいは、水牛の背に乗って田んぼから帰って来る親子の表情。運動会へ向かうトラックの屋根で見た屈託のない笑顔。

また、政治にふりまわされ続けるパナニコム難民キャンプの中の子どもたち。そこには確かに柵はあったが、子どもたちの心の中に柵はなかった。貧困の極で生きるクロントイ・スラムの子どもたち。確かに貧しいが、心までは貧しくない。短時間見て回っただけで、何がわかるという批判もある。しかし、目に見える柵の代りに、心の中に柵を張りめぐらし、物質的には豊かでも、精神的に貧しい日本の子どもたちと比べる時、タイの子どもたちは“生きていた。”

そして、最も印象に残ったのが、カンチャナブリにある村の学校の子どもたち。実に解放された表情をしていた。

タイから日本を見た時、“不沈空母”の上にコンテナがのっている姿が浮かんできた。多くの人間が、狭い日本の、そのまた狭く出口もなく光も差し込まないコンテナの中に詰め込まれている。その中でまた、日本の子どもたちは“管理”という名のオリの中に押し込められている。息ができなくなって当然だ。

こうした状況を変え、「無機物」ではなく「人間」の住む日本にすることが、パナニコム難民キャンプで真剣に日本語を学んでいる子どもたちにこたえる道だと思う。そしてまた、英語がペラペラにもかかわらず、言葉の障壁のある日本に定住したいという難民たちへの責任でもある。

彼らは言う、「日本はアジアではないか、だから日本定住を希望する。」と。

「難民援助と開発」

報告 岩城 剛 (愛知学院大)

— UNHCR「難民援助と開発」に関する専門家会議 —

難民の保護と第三世界の開発問題は、もともと異った領域であったが、現在の難民は開発途上国において大量に流出し、また一時的にせよ受け入れられている。この2つの問題は、原因においても対応の面でも切り離して考えられなくなってきている。

このことは以前から論じられてきたことだが、UNHCRも昨年'83年10月の執行委員会の、主要な議題のひとつとして取り上げた。UNHCRではこれに先立ち8月に、難民援助と開発の問題に関する各国の専門家を招いて意見交換のための会議を開いた。

以下は日本から唯一人出席した岩城氏による専門家会議の報告の抜粋である。

会議には21ヶ国から24名、先進国側は主として大学教授、途上国側は難民についての政策担当者（大臣クラスを含む）の他、ILO（国際労働機関）、OECD（経済協力開発機構）、世界銀行、UNDPなどの関係者が集まった。

<大量の難民流入が、途上国である受入国に及ぼす影響> インフレーション、物の不足、植生など自然環境破壊の問題、水の問題、労働市場など現地人との競合など様々の被害がある。

難民への対応には、恒久的解決策として、①本国自主帰還（自主的に祖国へ帰ること。UNHCRが間に入り政府の合意のもとに行われる。最も望ましい解決策だが、なかなか実現が難しい。）②第一次庇護国定住（難民が最初に避難した国で定住すること。アフリカなどに例が多いが、受入国の負担が多く、国内の不安要因になるとして、会議でも受入国側は難色を示している。）③第三国定住（一時的に避難した国からさらに別の国へ定住する。インドシナ難民の場合に顕著だが、受け入れる先進国側も失業率が高い等の理由から限度がある。）

いずれの方法にしても、難民の地域社会への適合（local integration）を進めることが必要となり、そのために難民だけでなく地元も共通に利するものとして、開発的性格（development-oriented）の援助計画が行われる必要がある。たとえば、①インフラストラクチャー（道路、港湾、灌漑施設など経済基盤）の建設拡充や自然環境の再生・保全、②食糧生産、③手工業（敷物、茶わん作り等）によって収入

を得られるようにすることなどがある。パキスタンでの植林計画、タイでの井戸掘り、医療活動による地域住民への貢献、などの例がある。

<そのような援助計画をどのように進めるか>

UNHCRは、計画を実施するには限界がある（従来の難民援助でも実際には他の国連機関やNGOが実施してきた）。そこで、この場合も制度的枠組としてはUNHCRが推進役となり、世界銀行、UNDP（United Nations Development Programmes 国連開発計画）など開発に携わる国連機関やNGO（民間団体）が具体的に関わることになる。

さらに追加的援助が必要となるが、これと一般の政府開発援助（ODA）との関連が問題となってくる。資金的には、途上国側としては、従来の開発援助に追加してグラント（贈与）の形でなされるべきであるとする。ODAが拡大するなかで先進国側の参加者からは、効率や一貫性に問題が生じるとして慎重な発言があった。

日本の反応については、各国の関心が集まっており、現実的な影響力がある。岩城氏自身が携った国際協力事業団の、タンザニアにおける総合開発計画の例をひき、日本の技術援助が対外的に評価されているとしながらも、現行の制度では欧米の民間援助団体に見られるような人間味にあふれたきめ細かい対応は難しいのではなかろうかと述べた。

岩城氏の報告の後、難民問題研究グループの討議では、難民を現在留っている地域へ適合させようとする動きに対する、先進国、難民を受け入れている途上国それぞれの主張、国内事情、思惑などについて語られた。難民のlocal integrationは必ずしもその国への定住を意味するのではなく、難民の自立（self-reliance）が先である等々。

また開発の問題は難民流出の原因とも関係しており、例えばベトナムの場合も経済再建がなされれば流出は減るであろうが、西側からの追加的経済援助は現在のところ外交的、政策的に困難な状況にあるという発言もあった。

JVCプロジェクト

1983年12月31日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
カオイタン (カンボジア難民 キャンプ)	技術学校 自転車, 牛車, モーターバイク, 自動車, 水ポン プ, 発電機の整備技術を習得する。各3ヶ月, 学 生数約300名,	UNHCR ロータリー近畿 全国社会福祉協 議会	嶋 紀晶※, 松本 一仁 トンディ, ソムエック
タイ・カンボジア 国境	レントゲン移動診療プロジェクト 移動レントゲン車による, 難民村およびタイ被災 村の病院への巡回レントゲン診療。	日本青年会議所 関東地区医療部 会 西本願寺 W.F.P./UNBRO	金子 一弘※, 武田 長久, 林 達夫 クリアンクライ, スラ ロドリゴ
	ノンチャン難民村・補助食供給プロジェクト 難民村の栄養失調児, 病人, 妊産婦, 乳幼児とそ の母親を対象とした補助食供給と栄養教育。	W.F.P./UNBRO	大野 直樹※, イサラサック トンチャイ, ヤオワラック, 近藤美佐子, 荻野美智子
タイ農村	給水プロジェクト 東北タイ農村での井戸掘り, 貯水タンクづくり	モラロジー国際 救援運動推進委 (MIRC), NTV	木村 信夫※, スラポン 佐藤正喜
タケオ (カンボジア国内)	井戸掘り 地域の診療所での井戸掘り	OXFAM モラロジーMIRC	簗田 健一(待機中)
パナニコム (第三国定住待ちの 難民の一時収容施設)	日本語学校 日本定住希望者のための日本語教育およびオリ エンテーション	天理教千葉 千葉県	佐藤 和美※, ティアン 鈴木絵理子, 石丸 寧 森本 陽子
クロントイ・スラム (バンコク市内の スラム)	奨学金援助 スラム児童のための学費援助 図書館 子供たち, 大人のための図書館 建材提供 スラム立退き者への物資援助	モラロジーMIRC NTV, JOFIC, 今井記念基金, 庭野平和財団, 一般寄付	福村 州馬※, サムルアイ, ソンボン アルニー, 坂場由美子 タウィチャイ, 伊藤真理子
ソマリア (東アフリカ)	農業プロジェクト マガネイ・キャンプにおけるエチオピアからのソ マリア難民に対する農業による自立促進プロジェ クト。	UNHCR 一般寄付	柴田 久史, アリヤラトネ 税田 芳三 山賀 望幸
レバノン (中近東)	医療ボランティア派遣プロジェクトおよび緊急物資援助 レバノンでの被災民(レバノン人とパレスチナ人) に対する医療活動の援助および物資救援。	一般寄付	竹内 俊之
日本国内	日本語家庭教師 定住難民の日本語学習援助 バザー ハンディクラフト販売	善 倫 寺 小山工業所 一般寄付	植田 博 他約30名 東 田鶴子 他約20名
東京事務所 (本部)	渉外, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, T/E 発行, 等	全 社 協 Y M C A 妙 心 寺 一 般 寄 付 杉並ライオンズ クラブ	岩崎 駿介(代表), 星野 昌子(事務局長), 熊岡 路矢, 田島 誠, 本橋 栄, 鶴田 三芳, 佐々木志保, 他約20名
バンコク事務所	渉外, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー等		高塚政生(バンコク事務所長) 深津 高子, 山西 映子 ボンピモン, カモン 森本喜久男, 小池 清治, ホフマン, 勝俣 江美, 他約10名

いらっしやいませ!

JVCのサバイディー・バザーです。

東 田 鶴 子



難民がタイで作ったそれはカラフルなハンディクラフトから、家庭に眠っている日用品、古着。手作りのクッキー、皮細工、エプロン。伊勢原から山口さん御一家が運んでくださる新鮮な野菜。12月から始めた綿あめ等々……たくさんありますよ。

バザーをはじめて約1年半。現在は地元の杉並区や江東区での自主バザーを中心に各地の教会や地域団体のバザーにもおじゃまさせていただいています。

タイに送る手段もないまま事務所の天井まで積みあげられていた絵本等を何とかお金にかえて現地に送ろうということで、日本国内で何か少しでもできることはないかしらという思いの学生、社会人が集まり、写真展の時に始めたバザー。2度3度と重なるうちに多くの協力者、理解者を得、ここまで育ってきました。スタッフの多くは日本語家庭教師グループのメンバーでもあります。

最初は「アレ忘れちゃった!」、お客さんを前に、

「いくらで売ろうか」等々迷いの連続でした。昨年5月から、もう少し計画性を持ち主婦の方々とも協力し合っていると始めたバザーの収益金が下の表のとおりになりました。多くの皆様、本当にありがとうございました。

自分達で作ったものをということで、クッキーを夜中までかかって焼きあげたり、趣味を生かした皮細工・粘土細工も登場。いただいた生地で主婦の方々が縫ってくださったエプロンは前回のバザーでまたたく間に売り切れてしまいました。

私達はバザーの目的を、収益をあげ少しでも役に立ててもらふこと、チラシ1枚くばることによって、少しでも多くの人に難民問題やJVCの活動を知ってもらふことと思っています。そしてどんな人でもどんな形でもかかわりあえるバザーにしていきたいと思っています。

皆いそがしい身なので、直前までアタフタし、当

日を不安のうちに迎え、それでも日ごろ会えないつかしいボランティア達の顔がたくさん現われ、無事に終り、つかれたねと言いつつも、またやろうという気になるのは、バザーのおもしろさに加え、なんととってもたくさんのすばらしい人々に出会えるからと感謝しています。

この一年半いろいろな所でバザーをささえてくださってありがとうございました。至らない点ばかりでご迷惑をおかけしたことをおわびします。

現在の悩みは、物の置き場所と輸送手段の確保です。また前述のエプロン等を縫ってくださる方も募集してます。あなたもバザーに参加してみませんか?

バザーの収益 ('83年5~12月)

5月	江東区文化センター	39,420円	*ハンディクラフトの売上げは別会計になっています。
6月	高円寺教会、青福センター	41,660円	
7月	阿佐ヶ谷駅前	109,281円	*この他に寄付、利子など、
8月	「市民の会」	1,428円	3,630円収入がありました。
10月	阿佐ヶ谷駅前、金曜日、 聖マーガレット教会	163,594円	*収益金の寄付先
11月	「日本のまつり」、社会事業大	7,120円	① クロントイ 205,552円
12月	江東区文化センター	145,052円	② レパノン 154,164円
	計	513,880円	③ JVC 運営費 154,164円
			計 513,880円

今年のバザー予定表

3月末または4月始め	春一番バザー	阿佐ヶ谷駅前
5月末	春本番バザー	江東区文化センター
7月末または8月始め	夏バザー	どこか新しいところで
9月末 " 10月始め	秋バザー	阿佐ヶ谷駅前
11月		(イベントをやりたいですね)
12月	年末バザー	屋内で

プロジェクト	仕事の内容	必要人員	期 間	条 件 等
カオイダン・キャンプ	上水道管敷設	1名	6ヶ月～1年	急募 上水（浄水）および水道管敷設の専門家または経験者
カオイダン・キャンプ	防犯灯設置	1名	6ヶ月～1年	急募 電気技術者・技能者
タイ・カンボジア国境	X線医療	1名	約3ヶ月	医師または看護婦
レバノン	医療活動	1～2名	6ヶ月～1年	急募 医師・看護婦、助産婦
タイ・カンボジア国境	補助栄養食供給	1名	〃	英語で活動できる栄養士
タイ 農村	給水活動 衛生教育	1名	〃	保健衛生・公衆衛生の専門家
パナニコム・キャンプ	日本語学校	1名	〃	外国人のための日本語教師
東京事務所	Trial& Error 編集	若干名	1年	編集経験者、興味のある方

この他①英語で活動のできる井戸掘り技術者、機械技術者、②会計事務能力、交渉・調整能力のある方 また、タイ語、英語、仏語などが日本語とバイリンガルにできる方。などを募集しています。

インドシナ難民救援キャンペーン・フィルム

16mm カラー映画

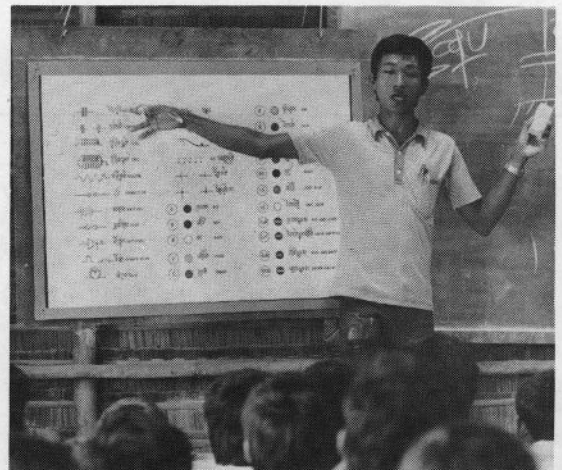
「国境を越えた人々——
——カオイダン難民キャンプの記録」

上映運動開始！

1月22日の富山県高岡市での上映を皮切りに、28日の東京、29日の京都と、上映運動が開始された。

この映画は、カオイダン難民キャンプにあるJVC技術学校の先生・生徒たちと、彼らと共に生きるJVCボランティアの日々の活動を通して、「自立する」ことの重要性を描いた記録映画である。1979年よりインドシナ難民救援活動を継続してきた浄土真宗本願寺派高岡教区寺族青年会の人たちが、2年以上にわたり自らの脚で集めた約800万円の制作費と1年半の歳月を費やし、昨年暮れ完成させたものである。しかし、未だに100万円不足しているという。

制作者とJVCとで上映運動実行委員会をつくり、主催者・団体を募るため、昨年末から試写用16mmフィルムとビデオを各地へ持ち歩き始めた。JVCの会員の方々、T/E購読者の皆さんも、より多くの人々に難民問題を深く理解して頂くため、是非とも上映会を主催して下さい。



フィルム貸し出し料は以下の通り。

- 一般（大学も含む）1回上映につき 20,000円
- JVC会員 〃 15,000円
- 学校 〃 100円

尚、収益金はインドシナ難民救援活動に充てます。制作費へもご支援を！

• 口座番号：金沢5-5575

• 加入者名：浄土真宗本願寺派高岡教区寺族青年会

JVCの活動は、みなさまからの募金で支えられています

難民救援活動をより充実したものにするため、以下の募金を受け付けています。ご協力をお願いいたします。

- **インドシナ難民救援募金** (11・12月小計 405,834 円)
東京事務所を窓口にしてバンコクに送られ、各難民キャンプでのプロジェクト費にあてられています。
- **ボランティア募金** (11・12月小計 77,400 円)
現地で活動しているボランティアのための栄養および健康管理費にあてられます。
- **クロントイ・スラム募金** (11・12月小計 34,100 円)
バンコク、クロントイ・スラム内の図書館および電気工養成訓練所の運営費などにあてられます。
- **デッグ・スラム奨学金** (スラム児童奨学金)
バンコク市内スラムの児童への奨学金などの学費援助、一口いくらかでも可。(11・12月小計 191,300 円)
- **JVC 運営経費募金**
事務経費、人件費、通信費等、JVC の仕事を進めて行く上で欠くことのできない資金が慢性的に赤字となっています。(11・12月小計 178,500 円)
- **アフリカ難民救援募金** (11・12月小計 4,610 円)

- **レバノン被災民救援募金** (11・12月小計 645,069 円)
レバノンでの被災者に対する医療活動および物資援助にあてられます。
- **日本語家庭教師募金** (11・12月小計 33,000 円)
定住難民の家庭は遠い所が多く、交通費が負担となっています。また日本語教材費も必要です。
- **医療募金** (11・12月小計 168,607 円)
緊急医療活動のための資金となります。

送金方法

住所、氏名、募金種目名を必ず明記の上、下記の郵便口座にお振り込みください。

口座番号：東京 9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

※ 会計の都合上、「Trial & Error」の購読申し込みとは別にご送金くださるようお願いいたします。

《郵便口座の変更》

医療募金は、従来の「東京 7-96238」から他の募金と同じ「東京 9-27495」に変更します。

編集後記

●12月末、3年ぶりにカオイダン難民キャンプを再訪する機会に恵まれた。JVC の技術学校で授業をするカンボジア人教師のハリのある声が印象的だった。(彼は映画『国境を越えた人々』の主人公でもある。) キャンプ内は一見のどかだが、あてどもなく長びく難民たちの生活はけっして正常とは言えない。ここで組織的に進められている救援活動は、この状況を打解できるわけではないが、少なくとも人人にある活気を与えていることは間違いない。

言い古されたことだが、飢えや病気で死んでいく事態が去っても難民問題は終わらない。あせって悲観的になっても状況は変わらない。

「Trial & Error」年間購読申し込み方法

一般購読者 1口 3,000円 (1冊送付)

賛助購読者 1口 10,000円 (4冊送付)

郵便口座番号 東京 3-54186

加入者名 JVC 東京事務所

住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。

JVC より

● JVC 紹介

ボランティア活動希望者および JVC について知りたいという方々のために、毎月の第一月曜日午後 6 時～9 時までオリエンテーションを行います。内容は① JVC の成立ち、②活動紹介 (海外-国内スライド付)、③世界の難民状況 (あるいは貧困の問題)、④ボランティア活動者として求められる資質と準備。

共に場所は JVC 東京事務所。担当は熊岡です。参加者は事前にご連絡を!

●前回 (33号) で紹介したベトナム 難民御所日本語学校の生徒たちが書いた作文集が出版されました。

習いおぼえた日本語でみんな一生懸命につづっています。1月11日にジャパントイムスでもとりあげられました。ご希望のかたは JVC 東京事務所にお申し込み下さい。1部 500 円 (実費)、送料 200 円でお送りします。

●裏表紙 撮影 坂本銃兵

JVCとは

Japan International Volunteer Center は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。

1979年の暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から救援に駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人たちが一体となり、現在の組織の原形ができました。

当初はタイ・カンボジア国境への物資輸送など、欧米の民間救援団体を補佐するものでしたが、現在は日本から寄せられる寄付金と各支援団体の援助金により、独自のプロジェクトを展開しています。

JVCは、難民、そしてそれと同様の窮境にある人々に、できる限りの援助を継続的に行うことを目指しています。常時50人近くの各国のボランティアが、タイ国内のラオス・ベトナム・カンボジア難民キャンプや、バンコクのスラム街において活動を続けています。

またタイのみならず、カンボジア、ソマリア、レバノンで活動している他、日本国内でも定住希望者のための日本語教育を行っています。

東京事務所と京都連絡事務所は、こうした活動の情報、人材、資金を現地と結ぶ日本の窓口として機能しています。



発行所 日本国際ボランティアセンター
 JVC東京事務所
 〒166 東京都杉並区阿佐谷南
 1-1-5 安田ビル3F
最寄駅 丸の内線新高円寺駅
TEL 03(316)3253

バンコク事務所 Japan International Volunteer
 Center 67 South Sathorn
 Road Bangkok, Thailand
TEL 286-4857

昭和59年1月20日発行
 毎月20日発行

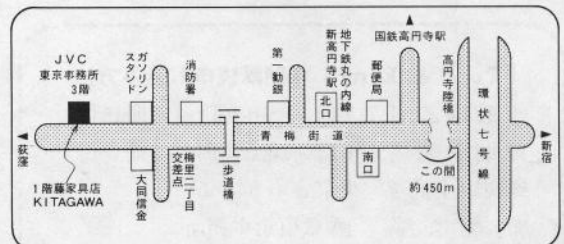
発行人 星野 昌子
編集人 本橋 栄

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

『レバノン難民救援募金』
 緊急アピール

JVCでは、レバノン緊急事態に応え、これまで募ってきた『レバノン救援募金』を更に推進するため、緊急アピールを行っています。今こそ小さな支援が何倍にも活かされる時です。緊急アピールに、一人でも多くの方が御協力下さることを願っています。

英語・仏語の堪能な医師等も募集していますので、よろしくお願ひします。



定価 送料共200円